炉辺の枕(7)

『ひとにぎりの未来／星新一』

SFが世界の扉を開いた

美賀多台　つだわたる

思春期に読んだ本はほとんどSFでした。その入り口になったのは星新一です。

それまでも本が好きで趣味は読書と書いてきましたが、15歳の時に、友人が読んでいた星新一を見せてもらい、それまで読んできた小説とは全く違うと感じました。

すぐに本屋で探しました。小説にSFという分野があることを知り、月刊誌SFマガジンを定期購読するようになりました。1970 年代です。

星新一はショートショートというとても短い形式の小説で、しかも文体も簡潔で読みやすいので、どんどんのめりこみました。

そしてSFの古典と言えるH・G・ウエルズ『タイムマシン』『宇宙戦争』『透明人間』等から米国のE・R・バローズ『ターザン』『ペルシダー』、レイ・ブラッドベリ『火星年代記』、さらに最高傑作であるポーランドのスタニスワフ・レム『ソラリスの陽の下に』までもたどりつきました。ダニエル・キース『アルジャーノンに花束を』に強烈な衝撃を受けました。

欧米系だけでなく、その当時の日本SF界をけん引していた星新一、小松左京、筒井康隆、眉村卓、光瀬龍、さらに安倍公房等をむさぼるように読みました。

1977 年発行、福島正美編集の『日本SFの世界』というアンソロジーに 21 人が書いていますが、そのほとんどを知っています。

しかし今は、SFと言われるものは、全くと言っていいほど読みません。これを書く前に池澤春奈(第 20 代日本SF作家クラブ会長)『わたしは孤独な星のように』や韓国のキム・ボヨン『どれほど似ているか』を読もうとしましたが、ともに挫折しました。

若い脳でないとSFは読めないのかと思いました。

世界を知った気分に

今回紹介する『ひとにぎりの未来』は 1969 年初版 72 年販売ですから、思春期真っ只中の私が夢中になった本です。今回、改めて読み返しましたが、十分に楽しめました。

40 編が収められていますが、8 割が新書版 5～6 頁のショートショートです。半世紀以上前に書かれたものですが、どれも人間の欲望、社会の行方を探るように描いています。

この本全体から、星新一は未来社会を、高度な通信網によって結びついた高性能のAIを発達させるが、人間はそれをうまく利用できず、逆に「支配される」と考えているのがよくわかり

ます。

現在の、スマホが普及し通勤電車でもそればかりを見ている社会は、それに近い状況です。

今回読み返して、気になったショートショートを紹介します。

『はい・・・』は人生の全てをAIの指示通りに生きる時代です。物心ついてから死ぬまで、自分で考えることなく「はい」とAIの指示に従うことで、悩むことのない、失敗しない、安心安全で平和な人生を送る、それがいい人生となっています。

『幸福の副産物』は、高い文明の星の住民が加盟する宇宙連盟に地球も加わることになる時代の話です。宇宙連盟から「地球を破壊することが出来る大量の核兵器を持っているのはなぜだ。宇宙征服を企んでいるのか」と質問されます。異星の人々は、同じ星の住民が殺し合うことや、何度も地球を破壊できるほどの核兵器を大量に持っていることが理解できず「他の星を侵略する意図がある」と地球人を警戒しています。

未来社会の様々な状況を設定して、現代社会の矛盾、人間の欲望を突いています。こんな小説ばかりを読んで、まだ実社会に出てもいないのに、私は世界を分かったような気になっていたようです。